自由論文

漢方薬が現代医療に及ぼした影響

－漢方薬の歴史を通して－

日柳佑理

目　　次

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　漢方薬への疑問－研究目的にかえて－

Ⅲ　研究方法

Ⅳ　漢方薬とは

Ⅴ　漢方薬と西洋薬の違い

Ⅵ　学問としての漢方

Ⅶ　結果と考察

Ⅷ　おわりに

参考文献・サイト

漢方薬が現代医療に及ぼした影響

－漢方薬の歴史を通して－

日柳　佑理

Ⅰ　はじめに

筆者はもともと、ハリー・ポッターシリーズを見て薬草のような自然から作り出す薬に興味を持っていた。そして、 薬理学の授業で漢方薬についての話があり、漢方薬が現代医療に及ぼした影響や歴史について知りたいと感じ、研究を始めることにした。

Ⅱ　漢方薬への疑問－研究目的にかえて-

筆者は、漢方薬について、次のような疑問を持っていた。本章では、研究目的とともに仮説も併せて提示する。

１．漢方薬が現代にどのくらい活きているか

仮説１：今は病院で扱うことが少なくなっているのではないか

仮説２：より気軽に使いやすいように、ハーブティーのような加工がされているのではないか。

２．漢方薬や漢方とはそもそもどんなもので、どのように今に伝わっているのか。

３．人間が統制に薬をどう活用していたのか。

４．薬や医療が人々の行動や思想に影響を与えているのではないか。

Ⅲ　研究方法

１．資料として、書籍、インターネットなどを用いて漢方について調べ、研究ノートにまとめる作業をする。

２．研究ノートを元に、自分の考えをまとめ、仮説の検証をする。

Ⅳ　医学の考え方

漢方に入る前に医学の考え方について示してみる。医学というと、いかにも科学的なイメージがあるように思うが、正反対のように見える宗教とは深いつながりがあるようだ。富士川（2010）は以下のように述べている。

> 神を安んじ、志を定め、欲することなく、求むることなく、大慈惻穏の心を発して普ねく含霊の疾を救わんことを誓願することは宗教の心によりて始めてよく成し遂げられるべきである。普同一等に病人の痛苦を治することに心を掛けることは人情として貴ぶべきことであり、徳義としてまさになさざるべからざることであるが、しかも宗教の心に基づくものでなければそれが徹底して実行せらるるまでには至らぬのである。

以上から、宗教も医療もそれぞれ信じるものがありそれを軸として実行している。

Ⅴ　漢方とは（漢方の概念と定義）

１．漢方の概念と西洋医学との違い

医学としての漢方は「食養生なども含めた医学」のことをいう。薬としての漢方薬は、漢方医学の理論に基づいて処方される医療品のことをいう。

漢方の基本は人間の体も自然の一部であるという考えで、体の一部分だけにスポットを当てるのではなく、体全体の状態のバランスを総合的に見直すといった特徴がある。また、体質や生活習慣などから見直し整えていくという特徴がある。なお、漢方は未病にもアプローチすることができることもメリットのひとつである。未病とは、病名がついていない不調のことをいう。漢方の考え方では、人の健康状態は健康と病気の区分が明確ではなく、間を変化している。つまり、発病には至らないくらいの軽い症状のみであることも多い。漢方医学の基本的な治療方針は、すでに約二千年前には確立されていたが、西洋医学ほど世界には普及していない。その理由の一つとして、西洋医学の診断基準が明確であり比較的容易に病名をつけることができるというものがある。西洋医学では、素手手の人が同じ体質であるという考えのもと基準値から外れた検査項目を委譲と判定する。そのため、症状がない場合でも検査値の異常があれば病名がつけられ治療を受けることができる。しかし、逆に言うとつらい症状がある場合であっても検査値が正常で原因がわからなければ治療を受けることはできない。一方、漢方医学は漢方医学最古の処方集である傷寒論をベースに症状の組み合わせから漢方薬の組み合わせを導き出す。そのため、漢方医学では症状がない患者様を治療することはなく、原因がわからない場合でも治療することができる。また、西洋医学では診断の頼みの綱とされている検査が漢方医学で行われることはなく、大学や専門学校などで学んだ西洋医

学の知識や考え方はあまり役に立たない。検査による明確で客観的な情報がない中で患者様の状態を正確にとらえることは難しいものになる[1]。

現代の診療報酬制度では、病名がつかない状態では医療保険は使えないきまりになっている。「保険医療機関及び保険医療養担当規則」診療の具体的方針第 20 条第 7 項には「イ入院の指示は、療養上必要があると認められる場合に行う。ロ　単なる疲労回復、正常分べん又は通院の不便等のための入院の指示は行わない。」とある。レセプト（診療報酬明細書）にも必ず病名欄があり、診療内容との整合性が審査される。漢方との違いが明確である。

２．漢方の考え方の特徴

漢方では、人の体は気と血と水の三つで構成されており互いに影響しあっているとされる。以下にその概念を示す。

〇気…目には見えないが、人の体を支えるすべての原動力のような要素。

〇血…全身の組織や器官に栄養を与える要素。

〇水…飲食物中の水分からできた体を潤す要素。

また、漢方は病気にかかっている人の状態を、体質や病気の状態や環境などを含めた様々な角度からとらえ、証に基づいて治療する。

〇証…病気の人があらわす様々な症状や訴えの中から、関連があるものを症候群としてとらえたもの。虚と実、寒と熱がある。

〇虚証…力が足りない状態で、体力が弱って病気への抵抗力が落ちている人。

〇実証…力が余る状態で、体力があって病気への抵抗力が強めな人。

〇寒証…熱が足りていない状態で、寒気や冷えを感じる人。

〇熱証…熱がたまった状態で、ほてりやのぼせを感じる人。

このような証に基づいた治療は、漢方独自のもので西洋医学との大きな違いでもある。この証にはこの漢方薬が最適という処方の組み合わせのようなものがある。そのため、同じ病気でも異なる漢方薬を使ったり、違う病気でも病気の鯨飲が共通している場合は同じ漢方薬を使ったりすることもある。

また、漢方では、自分の体を調べる物差しとして五行という考え方がある。

〇五行…自然界の代表的な土、火、木、金、水の五つの物質を用いて物事の性質を分類いた考え方[2]。

３．現代に生きる漢方薬の種類

現代、使用されている（流通されている）漢方薬の種類を調べた。

〇浸煎薬…生薬を煮出して液剤として製したもの。基本的には一種であることが多く、生薬の種類によっては成分が変化してしまうこともある。

〇生薬…天然のまま薬として応用することができる漢方薬。例：植物・菌体・血清など。

〇浸剤…水もしくはお湯で生薬を煮出し、有効成分を抽出したもので浸煎薬の一

種。
〇煎薬　…水に生薬を入れた後、一定時間熱を加えて進出させ有効成分を抽出したもので浸煎薬の一種。
〇湯薬　…二種類以上の生薬を刻んで煮出す量ごとに分包した漢方薬。

４．漢方薬と民間薬

民間薬は経験的に民間人の間で受け継がれてきたもの。どの薬草が何によかったのかという形で受け継がれてきたため、製法や対応疾患などは細かく決められていない。このような民間薬に比べて漢方薬は理論に基づいて作成された書類などに受け継がれてきたものである。そのため、製法や症状ごとの適切量が比較的確立されていることが多い。

西洋医学中心の現代でも、調べてみると、上記のような考えで治療が行われていることが分かった。このような医療を筆者はまだ受けたことがないが、医療機関では、ツムラが薬価基準表収載薬（処方薬）として多くの漢方薬を製造しており、西洋医学との融合をみることができる。このような状態はいつぐらいから始まったのか、さらに調べてみることにした。

Ⅴ．漢方薬と西洋薬の違い

漢方薬と西洋薬の違いは主に二つある。１つ目は、原料である。漢方薬は生薬を組み合わせることで作るのに対して、西洋薬は主に化学成分を合成してできた成分で作る。２つ目は、病気の治し方に対する考え方である。漢方薬は長い伝統と豊富な経験から作られた漢方医学をベースにして作られたもので、体本来の持つ働きを高めるように作用して体自身の力で正常な状態に戻そうとする。局所的現れた症状だけを見るのではなく、病気の人の全体を見て心身全体のひずみを治していく総合治療だといえる。自覚症状を重視して、その人ごとに違う個人差を大切にしている。そのため、具合が悪く病院で検査をしたが数値に異常がないといった症例にも対応していくことができる。

一方、西洋薬は症状として起きている現象に対して局所的に対応していく治療法である。病気を部分的に見ることで本来体がするべき働きを薬が代わりにしてくれる。しかし、その働きが切れてしまうと再び症状が出てしまうこともある。

以下は、これら漢方の良さがどのように現代に受け継がれてきたか、調べてみた内容である。

１．見直される東洋思想

約二百年前より世界中で西洋化が推し進められ、物質と便利さは大きく進化した。しかし、一方で自然破壊や環境汚染などの問題が発生し、根本的な解決策を求めて東洋思想が見直されている。西洋は自然を支配する対象としてみており、東洋は人が自然の一部としてみているように自然観一つをとっても明らかな違いがある。そして、漢方医学は東洋の世界観から発展した医学であるため自然を破

壊することや水・土を汚すことで人が病気になると考えられている。日本では、縄文時代より麻が栽培され、衣食住のあらゆる場面で活用されてきた。麻はどんな気候であっても短期間で成長し、農薬を必要としない上に土を浄化してくれる。また、神聖な植物の一つとして神事や伝統文化においても重要な存在であった。

しかし、戦後に栽培が禁止され今では麻は大麻と呼ばれ恐ろしい違法薬物の仲間入りをしてしまった。実は大麻には産業用と薬用があり、日本の大麻は薬用成分の少ない産業用だった。近年、この産業用大麻は材料としての価値と環境改善効果が世界的に認知され始め、各国で栽培面積を広げている。また、薬用大麻も顕著な効果と安全性が認められ、大麻に対する印象が変化しつつあると同時に漢方薬が再び注目されてきている。

2．各所の薬と観光化−近代における漢方薬

近代日本では、薬局は各地の観光名所として薬はご当地お土産として扱われていた。また、『名所図会』という有名な薬局や薬について紹介しているガイドブックのようなものが作成され出回った。『名所図会』によると、医学館薬品会は民衆も見ることができたため祭りのように人々でにぎわっていたそうだ。

図１　東海道名所図会　外郎透頂香（ういろうとうちょうこう）の店先

出所：私の漢方薬（図 1～3）

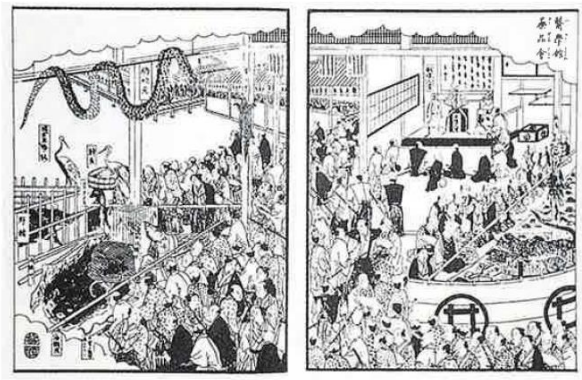

図２　医学館薬品会（尾張名所図会）

図３　医学館薬品会で実際に出品されたものと同種の漢方薬

○穿山甲…ミミゼンザンコウという動物のうろこを使った生薬。腫物や母乳不足・無月経・リウマチ・関節痛などに効果がある[3]。

○霊芝…レイシというキノコを使った生薬。適応疾患や対象症状としては、気管支炎や気管支喘息・めまい・不眠・動機・息切れ・神経衰弱・疲労感・呼吸困難・関・落ち　　着かない・イライラ・疲れやすい・食欲不振・消化不良・悪性腫瘍などがある。主な副作用としては、過剰摂取をしてしまった場合に限りめまい・口やのどの渇き・鼻水・鼻血・かゆみ・五の不快感・血便などが見られる[4]。

明治時代以降には医学や薬の近代化が大幅に進んだ。その影響が薬の宣伝の仕方やクオリティにも出ている。例えば、ポスターに薬の宣伝が制裁された新聞記事を描くなどといったデザイン性の高い広告が利用されるようになった。この時代の広告や宣伝方法は現代にも影響を与えている[5]。瓶なども、現代のものとあまり変わらず、新しい感じがした。

図 4　明治時代の楽善堂の広告（左）と精錡水（右）

出所：「薬の博物館」ホームページ

仮説２：より気軽に使いやすいように、ハーブティーのような加工がされているのではないか。

「加工」というキーワードで考えれば、気軽に使いやすいように容器に工夫を凝らしたり、親しみやすい広告を出したりしているので、仮説に近い結果が得られたと感じている。現代の医療法では、広告規制がなされているので、自由な広告を打つことはできないが、近代ではなんでもできたのだと思った。その分、広告で統制できてしまう怖さもある。

Ⅵ．学問としての漢方

１．本草学と博物学

本草学とは中国や東アジアで発達した医薬に関する学問のことである。秦や漢以後、六朝にかけて神仙思想が発達して方術が盛んになると神仙家の薬と医家の薬を区別する必要性が生まれるようになった。そのころに、方術の薬を示す用語として本草が生まれたとされる。その意味は、「草石の性に本づくもの」であることから単に薬草のみを示しているわけではない。本草という用語の文献上の初見は『漢書』巻 25『郊祀志下』であり、紀元前 31 年に条に「候神方士使者副佐　本草待詔七十餘人皆歸家」とあり、方士ら神仙を説く者たちと共に本草待詔 70 余人を免職にしたという記事が見える。但し、『漢書』巻 30『芸文志』には本草という名を持つ書名は見られない。また、梁の陶弘景は『神農本草経』に補注を加えて、730 種の薬名を記録し本草学の基礎を築いた。そして、明代の 1596 年に李時珍が著わ

した『本草綱目』は、本草学の集大成であり 1871 種の薬種を収録している。日本の本草学（博物学）にも大きな影響を与えた。

日本では奈良時代以来、本草学に関する書物が読まれており、10 世紀には『本草和名』という、本草の和名を漢名と対比した書物が編纂された。江戸時代には、1607 年の『本草綱目』の輸入をきっかけに本格的な本草学研究が興った。この本草綱目を入手した徳川家康もこの年から本格的な本草研究を始めている。林羅山は 1612 年に『多識篇』を著わし、『本草綱目』を抄出した。以後さらに研究が進められ、『大和本草』（1708 年）を著わした貝原益軒や、田村藍水などの著名な本草学者が活動した。1738 年には稲生若水が『庶物類纂』を編纂した。そして、杉田玄白らによって蘭学が成立すると、ヨーロッパから渡ってきた博物学書の翻訳が行われた。翻訳自体は、その一世代前の野呂元丈がすでに行っていたが、これは一般に広まらなかった。大槻玄沢や司馬江漢がオランダ渡りの図鑑をいくつか翻訳して公刊した。博物学書の知識は、幕府が危険視するような思想性が薄く実用的な知識でもあったため、積極的に受容され、本草学にも影響を与えた。江戸時代には、以上のような本草学だけでなく、古典園芸植物の研究や、『詩経』や『万葉集』に出てくる動植物の同定（名物学）も流行した。また、寺島良安が図解百科事典『和漢三才図会』を著したり木内石亭や佐藤中陵が石の分類体系を構築したり、木村兼葭堂がイッカクの角を研究したりした[5]。

『大和本草』（国立科学博物館の展示）

図 5　『大和本草』
出所：「薬の博物館」ホームページ

『傷寒論』（図 6）は後漢末期から三国時代に張仲景が編纂した伝統中国医学の古典である。内容は伝染性の病気に対する治療法が中心となっており、『宋版傷寒論』・現在の『宋版傷寒論』では、「辨太陽病脈證并治（上・中・下）」・「辨陽明病脈證并治」・「辨少陽病脈證并治」・「辨太陰病脈證并治」・「辨少陰病脈證并治」・「辨厥陰病脈證并治」を『三陰三陽篇』、「辨不可發汗病脈證并治」・「辨可發汗病脈證并治」・「辨發汗後病脈證并治」・「辨不可吐」・「辨可吐」・「辨不可下病脈證并治」・「辨可下病脈證并治」を『可不可篇』といわれている。『三陰三陽篇』では、病気を太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰の 6 つの時期にわけ、それぞれの病期に合った薬を処方することが特徴である。

図 6『傷寒論』初版本
出所：「薬の博物館」ホームページ

Ⅶ　結果と考察

本研究の結果、以下の示唆を得た。

①漢方薬は経験に沿っていることが多い。そのため、扱いづらいと感じる人も多くいたのではないだろうか。そして、経験に沿っているため政府が理解できていない漢方医学や漢方薬も多くある可能性が高く、政府からの信頼は得られていなかったのではないか。

②西洋医学のほうが明確であり比較的判断しやすいため漢方医学よりも世界に普及したが、症状がある場合であっても病名がつかないと治療を受けられないというデメリットがある。そのため、西洋医学のデメリットをカバーすることをできる特徴を持つ漢方医学も生き残り続けているのではないか。

③浸煎薬についてインターネットを活用して調べたところ、煎じ薬という名前で多くヒットし、具体性もより高いことから浸煎薬よりも煎じ薬のほうが少なくとも世間ではポピュラーである可能性がある。

④一般人であっても医療の概念を知っている人が増えた。しかし、一般人が医療の分野に手を出したことでまじないや不思議なものが多く作り出された。

⑤漢学で言うところの「遊学」という字体から学ぶことが遊びであるとされていたのではないか。そして、知識や技術への理解が乏しい状況であったため西洋の人々が教えに来た考え方に引きずられる形で当時の日本人の考えが変化していったのではないか。

⑥観光地やご当地お土産のような認識であったことから、当時の民衆にとって薬や薬局は信用できるものであり同時に生活になじんでいるものであったと考えられる。また、名所図会が世間に出回ることでより観光のイメージが強まりより身近なものとしてとらえられるようになっていったのではないか。

⑦西洋医学では病名を必ず設けないといけないことになっているが、漢方医学では未病の考え方があった。これについては、以下のことが考えられる。

・病名があった方が医療に関するデータを取りやすいから。

・西洋医学にはEBMという概念があったから[6]。日本医師会監修（2020）『医療秘書概論・実務　医療情報処理学　医療関係法規概論』（p143）によれば、西洋医療ではEBM（evidence-based medicine）がかなり重要視されていることがわかる。EBMとは科学的根拠に基づいた医療のことであり、科学的な根拠を示すために病名を活用していると考えられるのではないか。EBMは漢方医学にない特徴かつ科学的な根拠がなければ医療として成立しないという西洋医療の性質を表した考え方だといえる。

Ⅷ　おわりに

研究ノートを作成し、自分が興味を持った分野について少しずつ突き詰めていくことが研究をしていて特に楽しかったと感じた。この体験を通して、今後疑問に思ったことや知らなかったことは積極的に調べて生かしていきたいと考えている。

【引用文献・サイト】

(1) 広島県環境保健協会「漢方コラム」　https://www.kracie.co.jp/ph/k-therapy/
2023年7月15日参照

(2) 漢方セラピー　https://www.kracie.co.jp/ph/k-therapy/
2023年8月9日参照

(3)「私の漢方薬」　http://kampoguide.com/syoyaku/senzanko.html
2023年11月3日参照

(4) 知っておきたい『漢方生薬』イアトリズム
https://www.iatrism.jp/dictionary/crude-drug/data/1064
2023年9月10日参照

(5) 内藤記念博物館「くすり博物館だより」2013年号

(6) 日本医師会監修（2020）『医療秘書講座④　医療秘書概論・実務　医療情報処理学　医療関係法規概論』

【参考文献】

・磯　公昭（1986）「漢方粥」東京書籍株式会社
・江藤文夫（2019）『医師がひもとく日本の近世　医療と日本人』医歯薬出版
・株式会社ツムラ（2023）「ツムラ医療用漢方製剤一覧」医家用資料
・株式会社ツムラ（2023）「ツムラ医療用漢方製剤・副作用一覧」医家用資料
・日本医史学会編（2022）『医学史辞典』丸善出版
・水巻中正（1991）『くすりの文明誌』かんき出版